

茨城の教育

茨城県高等学校教職員組合
310-0853 茨城県水戸市平須町表原1-9-3
telephone 029-305-3075
facsimile 029-305-3317
www.mito.ne.jp/~iba-kou/

つくばの熱い夏 夏季学習交流集会



茨高教組の夏季学習交流集会が8月21日(土)、22日(日)に1泊2日の日程で筑波グランドホテルを会場にして開催された。

平和を学ぶ放送委員の生徒

1日目は、つくば工科高校分会の根崎さんから「歴史を語り継ぐ～谷田部海軍航空隊の取材を通して」の報告があった。高校の放送委員会の活動として、常磐自動車道にかかる「飛行場橋」という名前の橋の由来を調べることからはじまり、「谷田部海軍飛行場」とそこで特攻兵士として死んでいった「昭和隊」(谷田部飛行場で訓練した特攻隊名)の関



係者の生の姿が掘り下げられている。

特攻隊が地元茨城と深くかかわっていた話で、戦争について平和について考えるよい機会となった。

筑波散策で新たな発見

その後3時過ぎから筑波山神社と筑波山頂上付近の散策に出かけた。参加者から「ここには江戸時代までは中禅寺という寺があって、江戸城の鬼門に当たることから徳川幕府の多大な支援を受けた。しかし、中禅寺は明治時代になって廃仏毀釈で破壊され、明治6年に筑波山神社となった」という説明があった。

現在でも残る中禅寺の礎石などを見つけたが、近すぎて、それほど歴史的なことを知らない神社、筑波山であったが、新たな発見の多い散策となった。

演劇部活動を通して

2日目は、友部高校

分会の来栖さんから「部活動の楽しみ方 & 演劇的教科指導」の報告があった。友部高校演劇部が全国大会に出場し、国立劇場で演劇公演をするまでの生徒の様子が報告された。3年生が引退し、部員が2人しかなくなった中で、部員をいかに増やしたか、3人の舞台「トシドンの放課後」が何故全国大会で高い評価を受けたのかなどについて、具体的に報告された。

部活や授業を通して生徒とどのような関係をつくっていくかを考えるよいきっかけとなる報告だった。

告だった。

生徒を見つめる授業公開

最後に、上郷高校分会の岡野さんから「授業公開、授業検討会の教育的可能性」の報告があった。上郷高校での5年間の教師生活の中で、一人一人の生徒の現状に即した指導の重要性を学んだことが語られ、「授業公開、検討会」の取り組みの中で、教員が授業と授業における生徒の様子をざっくばらんに話し合う中で変わってきたことが語られ

た。

討論の中では、「管理職が授業のやり方にまで口を出してくる。教師に全く相談もなく、4人の班学習の形で授業をやりますとPTA新聞に書いてしまった」というような発言もあったが、「授業公開、授業検討会」も生徒の実態をもとに教職員が授業について十分な時間をかけて話し合い、合意づくりをしていくことが何よりも重要であることが確認できた。

必修〈道德〉は生徒の道德性の発達をうながすか？ (第31回)

イスラエル国家による杉原千畝発見物語の不自然

「六千人の命のビザ」——杉原千畝評価におけるナショナリズムとシオニズム(16)

§ 6

シオニズムと杉原千畝 (つづき)

イスラエルによる杉原探索

杉原千畝の物語における第一の山場は、もちろん1940(昭和15)年7月から9月にかけての、在リトアニア日本領事館における6000人分のビザ発給の場面、とりわけ杉原が大日本帝国政府の訓令に反してビザ発給を決断する経緯である。ただし、この部分は茨城県教育委員会作成のテキスト『ともに歩む』では右翼国粹主義団体「日本会議」に配慮してあえて省略されているのであるが(本紙997号)。

杉原千畝の物語における第二の山場は、戦後、外務省を解雇され貿易会社で働いていた杉原を、「杉原ビザ」で生き延びたユダヤ人たちが見つけ出して再会をはたす場面である。杉原幸子の『六千人の命のビザ』(1990年、朝日ソノラマ)によると、それはビザ発給から28年後の1968(昭和43)年8月のことだった。突然、在日本イスラエル大使館から連絡があり、杉原夫妻が大使館を訪問してニシュリと面会したという。ニシュリとは、ビザを求めてカウナスの日本領事館前に集まったユダヤ人群众の代表として、領事代理の杉原との交渉にあたった5人のうちの1人である。ニシュリは28年前に杉原が発給した

ビザを大切に保存しており、この劇的な再会の場でボロボロになったビザを見せたという。

ニシュリの説明によると、ユダヤ人たちは自分たちの命を救った杉原の消息を長いこと探していた。戦後、日本の外務省に「すぎはらちうね」ではなく「スギハラセンポ」として照会したために、「該当者なし」との回答しか得られず、探し出すことができなかった。他方、杉原の方でもユダヤ人たちの消息をたずねて、在日本イスラエル大使館を訪れたことがあった。その時イスラエル大使館は、「杉原ビザ」により生き延びたユダヤ人の件については把握していなかったのだが、その際、杉原が自分の住所を知らせておいたため、今

回杉原を探し当てることができただけだという(160-61頁)。

1998(平成4)年にフジテレビで、加藤剛が千畝を、秋吉久美子が幸子役を演じたドラマ『命のビザ』が放映された。脚本の久保田千太郎は、鎌倉の自宅に突然ニシュリが訪ねてきたことにしたうえで、ニシュリにこう言わせている。(なお、1968年当時、杉原の自宅があったのは藤沢市つげま鶴沼であり、鎌倉はその後の転居先である。)

「あなたに救われた2000人と、あの家族の6000人の人々は、今も世界中であなたに感謝し、あなたを探し続けています。私はあなたを探すためにみんなの代表として、それで日本にやってきました。」(www.youtube.com/watch?v=Ne6nSjGNmcE)

再会の翌年1969(昭和44)年9月、杉原はエルサレムに招待され、宗教大臣ゾラフ・バルハフティフと面会した。ゾラフ・バルハフティフもまた1940年当時、杉原と交渉した5人のユダヤ人のひとりだった。彼は、杉原ビザにより日本を経てアメリカに脱出後、1947年パレスティナに移住し、1948年5月のイスラエル建国宣言に署名した34人のひとりとなった。イスラエル建国後は、1949年から1981年までクネセト(イスラエル国会)の議員となり、1953年から1969年までは、宗教大臣もつとめていた。

杉原千畝探索の疑問

杉原幸子が回想するイスラエ

ル大使館員ニシュリの話には矛盾がある。ユダヤ人たちには「ちうね」の発音は難しいので、杉原が音読みで「センポ」と呼ばせていたため、照会を受けた日本の外務省が「スギハラセンポ」はみあたらないと回答し、ユダヤ人たちによる杉原探索はうまくいかなかったのだという。しかし、ニシュリが保存していた「杉原ビザ」には、杉原の自筆で「杉原千畝」と明記されていたはずである。外務省に照会する際に、ビザの現物か写真を示せば、ただちに杉原の所在をつきとめることができたはずである。そもそも1940年当時のカウナスの日本領事館にいた「スギハラ」がわからないなどということはありえないだろう。

ニシュリが一民間人にすぎないのであれば探索は容易ではないかもしれない。しかし、ニシュリはイスラエル政府の人間である。イスラエル政府にしてみれば、数年前の日本人外交官をさがしだすことはきわめてたやすいことだろう。

イスラエル政府は、イタリアを経てアルゼンチンに逃亡し、偽名を使って潜伏していたアイヒマン、すなわちゲシュタポ・ユダヤ人課課長として、ナチス・ドイツ占領下のヨーロッパ各地から、ポーランドの絶滅収容所へのユダヤ人移送を指揮したアドルフ・アイヒマンを探し出してイスラエルに拉致し、裁判にかけて処刑した。イスラエル政府がかれを拉致したのは1960年である。ハンナ・アーレントは言う。

「アドルフ・アイヒマンがリカルド・クレメントと

いう名でアルゼンチンに生きていることを知るのにイスラエル秘密警察が数年を費やした[略]ことがむしろ不思議なのだ。」(『イェルサレムのアイヒマン』1963年、大久保和郎訳、みすず書房、184頁)

イスラエル政府の探索能力を考慮するなら、身を隠していたわけでもない杉原をさがしだすのに28年もかかったという話を真に受けるわけにはいかない。「センポ」で探していたためにみつけれなかったというなら、逆に1968年にいたって見つけることができた理由の説明がつかない。

イスラエル政府は、建国以来一貫して杉原千畝を探し続けていたわけではあるまい。戦後、杉原千畝がたずねた時点で、イスラエル大使館はこの件については何の関心も示さず放置していた。イスラエル政府は、1968年の直前に杉原千畝を顕彰することを決定し、ただちに探し出し、そのうえで1940年当時に直接交渉をおこなった当事者であるニシュリをイスラエル大使館に赴任させ、杉原に連絡をとったに違いない。

杉原ビザの意味

第二次大戦中のユダヤ人迫害に抗してユダヤ人を保護した功労者の顕彰事業において、杉原千畝の行為はどのように評価されたのだろうか。

ゾラフ・バルハフティフの『日本にきたユダヤ難民』(滝川義人訳、1992年、原書房〔原著 *Refugee and Survivor, Rescue*

Attempts during the Holocaust, 1984, Jerusalem])によると、「杉原ビザ」の位置づけはつぎのようなものである(93-100頁)。すなわち、1939年9月のナチス・ドイツのポーランド侵攻により、ポーランドを脱出して隣国リトアニアに到達したユダヤ機関の幹部活動家ゾラフ・バルハフティフは、そこからパレスティナに脱出する方策をさがしていた。たんに自分と家族の脱出が問題ではなく、その地にいる大勢のユダヤ人を脱出させるのが彼の任務である。

トルコ経由で国際連盟の委任統治領パレスティナへ脱出する最短ルートは、トルコ共和国がビザ発給を拒否しているため閉ざされていた。たまたまオランダからカウナスに来ていたユダヤ人留学生たちが、オランダ領事から、オランダ領キュラソー島とスリナムならビザなしで入国可能だとの情報を得た。それを聞いたゾラフ・バルハフティフは、オランダ領事に掛け合い、「ビザを必要としない」との文言のスタンプを捺印してもらい、まるでビザであるかのように見せかけたうえで、日本領事館に「日本通過ビザ」を発給してもらって、ユダヤ人を脱出させるという手法を考えだした。ラテンアメリカのキュラソーやスリナムは本当の目的地ではなく、あくまでパレスティナやアメリカに脱出するための方便である。日本国内にユダヤ人を抱え込むことになる「日本入国ビザ」であっては発給される可能性はないが、形式上最終目的地はキュラソーとスリナムで、日本は一時的に通過するだけという「日

本通過ビザ」であれば発給してもらえるかもしれない。

当初、現地のユダヤ人の多くはそんなビザもどきは紙くず同然でうまくいくはずがないと馬鹿にしていたが、ゾラフ・バルハフティフは他に道がない以上、この方法に賭けるしかない と熱心に説き回った。こうして、1940年7月、領事代理杉原千畝のいるカウナスの日本領事館前にユダヤ人が列を作るようになった。

「諸国民の中の正義の人」

イスラエル政府は、エルサレムに設置したヤド・ヴァシェム(ホロコースト記念館)の「正義の人の庭園」内の「正義の壁」(「正義の異邦人」)の名前を記録し、顕彰している。「諸国民のなかの正義の人」とは、ホロコースト期において、ユダヤ人を救うために生命を危険にさらした非ユダヤ人(=異邦人)であり、1963年以来、法にもとづいて設置された委員会(委員長は最高裁判所判事)がその選定にあっている(www1.yadvashem.org/yv/en/righteous/program.asp)。2010年現在で23,226人が選定されているが、日本人は杉原千畝ただひとりである。なお、「2万人」のユダヤ人を救ったことになっている樋口季一郎らの名はない。

さて、イスラエル政府の委員会は、杉原ビザの前提たる「キュラソー・ビザ」を発行したオランダ領事2名を「諸国民のなかの正義の人」として顕彰するかどうかを検討した。1969年に

なって、委員会から見解を求められたゾラフ・バルハフティフは、「地位を失う可能性はあったが生命を危険にさらしてはいない……。二人が、通常いうところの組織の規律に服する状況にあったのではない。二人はそれぞれがボスであった。」と意見を述べた。オランダ領事は「正義の人」とはされなかった。いっぽう杉原千畝は、「正義の人」と認定され、1969年12月、杉原はヤド・ヴァシェムの表彰式に出席するためエルサレムを訪問した(杉原幸子は9月としているが、ゾラフ・バルハフティフの邦訳では12月)。杉原がゾラフ・バルハフティフに面会したのはこの時である。

オランダ領事が除外され、杉原が認定された経緯に関する『日本にきたユダヤ難民』の記述には多少の曖昧さがつきまといている。いずれにしても、当事者であったイスラエル政府の高官ゾラフ・バルハフティフの意見が決め手になっていることは明らかである。

杉原の「探索」が、助けられたユダヤ人たちによって継続的におこなわれていたとは思えない。1968年から69年にかけて、イスラエル政府によって杉原の「探索」と顕彰が一挙に実行されたと考えるのが自然である。イスラエル政府による杉原の発見と顕彰が、イスラエル建国(1948年)からだいぶ時間を経過した1968年以降のことであった背景にはイスラエル政府によるホロコースト評価の転回がある。

この点について次回検討する。(つづく)